

[研究論文]

エジプトの日本式学校 (EJS) における TOKKATSU 導入の現状と課題  
 - TOKKATSU セミナーと授業研究会, 保護者セミナーを通して -  
 Current status and issues of introducing TOKKATSU in Egyptian Japanese Schools (EJS)  
 -Through the TOKKATSU seminar, class study group, and parent seminar-

脇 田 哲 郎  
 Tetsuro WAKITA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻

本研究は、2019年3月と同年12月に訪問したエジプト国ルクソール地方とカイロ市、ハルガダ市の特別活動（以下、特活(TOKKATSU)）を中心とする日本式学校（以下、EJS (Egyptian Japanese Schools)）で実施された特活セミナーと授業研究会、保護者セミナーから見えてくる導入の現状と課題を整理し、今後のEJSの在り方を探ってみようとするものである。ルクソールのEJSで行われた特活セミナーでは、マスタートレーナー（以下、MT）から、基本を押さえた指導を受けていることが分かった。ただ、学級会や学級指導の授業は教師主導型の授業が行われており授業改善の課題も見えてきた。また、カイロ市やハルガダ市のEJSでは、保護者を対象にした土曜授業やセミナーが開催され、EJSの良さを広く紹介しようとするEJSの努力も伺える。その結果、保護者にはEJSの教育的な効果が認識されてきている。現在、40校のEJSでの教育を一般の公立学校に広げていくには、教員の意識改革や公立学校への一般化などの課題も見えてきた。

キーワード：日本式学校(EJS)、特活(TOKKATSU)導入、TOKKATSUセミナー、授業研究会、保護者セミナー

1 研究の目的と方法

(1) 目的

2016年2月に「エジプト-日本教育パートナーシップ」(以下、EJEP)が首脳間共同声明の附属文書として発表された。EJEPは、エジプトの平和・安定・発展及び繁栄に資する長期開発戦略で重点課題とされる人材育成を目的として締結されたものであり、就学前教育から基礎教育、技術教育そして高等教育に至るまで、エジプトの教育システム全体に対して日本の教育の特性を生かした包括的な人材育成を図ろうとしているところに特徴がある。(エジプト大使館公式サイト引用)

EJEPの具体的な取組として文部科学省は、日本型教育の海外展開推進事業(EDU-Port ニッポン)の中で①今後5年間でエジプトから日本への留学生・研修生を2500人以上受け入れる、②基

礎教育段階において、日本の教育における特徴的な要素である「特別活動」をエジプトの公立学校でも導入する、③技術教育について、日本企業を含む民間企業と連携しつつ改善を図る、④就学前教育について、「遊びを通じた学び」の普及を図る、⑤エジプト日本科学技術大学(E-JUST)に対する両国間協力を継続・強化する、の5点を示している。ここに示されている、②特活の導入と④就学前教育の普及を具体的に進めるのが、EJS校における教育活動である。

特活導入ガイドライン(2018, EJSProject)(以下、ガイドライン)の「0-はじめに」には、次のように示されている。

表1：ガイドラインのはじめにに書かれた内容

エジプト国の教育は、「全人教育」という日本式教育の導入を通じて、それらで身に付く力を保証し、「知・徳・体」のバランスの取れた成長を目指している。
--

つまり、エジプト国では、知・徳・体のバランスの取れた教育を実現し、知的にも人格的にも身体的にも健全な国民の育成につながるような教育が希求されているのである。

このような教育が求められている背景には、急速な人口増大と不安定な社会・経済状況、公教育における学校施設や教職員の不足、教育の質の低下といった問題や、進級試験を重視する学歴社会的な傾向から暗記を中心とする詰め込み型教育が行われたり十分な教育を受けられなかった若者が過激主義に走ったりする危険性などが挙げられる。このような教育の実現に、なぜ特活なのかということであるが、ガイドラインにはこのことについて次のように示されている。(表2)

**表2：ガイドラインに示された「特別活動」**

特活は、「特別活動」という言葉に由来し、日本を基盤とした初等教育の教育課程における教科外の活動のことである。これらの活動の目的は教室や学校、地域社会に属する児童のために、適した環境を作ることであり、それにより、児童は教室や学校、地域社会での問題解決能力を身に付けることができる。

ここに示されている内容を、日本の特活の特質に照らしてみると「教室や学校、地域社会に属する児童のために、適した環境を作る」とは、児童が自らより良い学級や学校、地域社会での生活を作るとのことであると考えられる。また、「それにより、児童は教室や学校、地域社会での問題解決能力を身に付けることができる」とは、より良い集団生活の問題を解決する能力と自己の生活問題を解決する能力のことであると考えられる。このような学級や学校、地域社会を生きる子供たちに集団や自己の生活課題を解決する能力を育成することが必要とされることから、特活を中心とする日本式の学校教育が求められているのである。

エジプト大使館の公式サイトには、EJS と特別活動について次のように示されている。(表3)

**表3：エジプト大使館の公式サイトに書かれた「特別活動」**

「エジプト・日本学校」(EJS) は前述のようなエジプトにおける現状の教育課題から鑑み、初等教育段階での「特別活動」と呼ばれる教科外活動が取り入れられている点に最大の特徴があります。日本で教育を受けた方なら馴染みのある、給食の配膳や掃除、日直等は全て児童が自主的に行っているものです。これらの活動は特別活動と呼ばれますが、エジプトではこのよ

うな教科外活動は私立・公立を含め今までありませんでした。今回の「エジプト・日本学校」ではこの特別活動を日本式教育課程の基本的構成要素であると考え、児童に積極的に給食の配膳や掃除、日直を任せることで、児童自らの学ぶ意欲や集団内で醸成される公平性や協調性を育むことが期待されています。

エジプト国では、現在、40校のEJSを設置して日本式教育の導入に取り組んでいる。エジプトの教育省は、2015年に2校、2016年に12校のパイロット校を設置して日本式学校の導入に向けた調査研究に取り組み、2018年度終了までには200校に拡大していきたいという考えを持っていたが、現存するEJSは前述の通りである。

40校のEJSは、全ての学校が黄色を基本に橙色の装飾がなされている。(写真1)エジプト大使館の公式サイトに示されているような学校給食はまだ実施されていないが、学級会、学級指導、日直等の取組は行われている。本サイトの内容を見ると、特活で児童の自らの学ぶ意欲や集団内で醸成される公平性や協調性を育むことが期待されていることが分かる。



**写真1：10ts ラマダン EJS**

果たして、エジプト国のように歴史も文化も異なる異国に日本式の教育の導入は可能なのだろうか。今回、2019年3月と同年12月に訪問したルクソール地方とカイロ市、ハルガダ市のEJSで実施された特活セミナーと授業研究会等から、EJSの現状と今後の課題を探ってみるのが本研究の目的である。

## (2) 方法

- ① 2019年3月に訪問したルクソール地方のケナEJS、アシュートEJSで行われた特活セミナーと授業研究会の実施状況から現状と課題を

探る。

- ② 2019年12月に訪問したカイロ市のザイド EJS とハルガダ市 10ts ラマダン EJS で行われた保護者セミナー等から現状と課題を探る。

## 2 ケナ EJS とアシュート EJS における特活セミナーと授業研究会

特活セミナーは、EJS 校と近隣の学校の教員に対して、これまで本邦研修やエジプトで JICA 専門員から特別活動の研修を受けた MT と特活専門員として JICA から依頼された報告者から特活に関する研修を受けるものである。

### (1) ケナ EJS 特活セミナーと授業研究会

(2019年4月1日実施)

#### ① MT による特活セミナー

セミナーは、3名の MT から EJS とミニ特活についての説明があった。3人の説明は、特活の本質を踏まえた内容であり、日本に来て説明しても問題はないものだった。ただ、特活の内容と指導法についての説明が多く、なぜ、エジプトに日本式学校が必要なのか、特活の導入が必要なのかの説明が欲しいところであった。この部分が、セミナーに参加している周辺の学校の教員には必要ではないかと考えた。何れにしても、これまでの MT 研修会等の成果は十分に現れていたと考える。さらには、エジプト人によるエジプト人への特活の研修会の実施の可能性を大いに感じた。

#### ② 専門員としての報告者による特活の指導

報告者は、前年度訪問したタンタ EJS とベニスエフ EJS の映像から「学級会」と「学級指導」の全体を理解させようとしたが、セミナーに参加している近隣の教員等の特活の認識不足から難しさを感じた。また、日本語のパワーポイントにはアラビア語の訳が付されていなかったのわかりにくかったと考える。今後は、EJS における特活セミナー参加者の特活の理解度や参加者のニーズを把握する必要性を感じた。

例えば、「学級会や学級指導をなぜしなければならぬのか」「学級会や学級指導とは何か」

「学級会や学級指導はどう指導するのか」等、受講者が知りたいことについて、予め調査しておく必要があると考える。

報告者がセミナー参加者に話した内容は次の通りである。

表4：特活セミナーでの報告者の指導内容

- |                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 前回訪問したタンタ EJS の映像を示しながら学級会についての説明 |
|--------------------------------------|

① 学級会では机の配置をロの字にして話し合うこと

② 司会や副司会、記録などの役割を子供に任せ、できるだけ自主的な活動にすること

③ タンタ EJS では、積極的に手を上げて自分の考えを伝えようとしていたこと

④ 学級会の指導には、発達の段階に応じて教師も積極的に介入すること

2. ガイドラインに示された学級会についての説明

① 学級会で取り上げる問題は「学級生活の向上」に関するものであること

② 学級の問題を話し合うことは豊かな人間性や社会性の育成につながる

3. ベニスエフ EJS による映像を示しながら学級指導「規則正しい生活」の授業分析

① 授業の導入に教師のロールプレイが行われたこと

② 教師のロールプレイで学習問題が焦点化されたこと

③ 子供たちは教師のロールプレイに見入っていたこと

4. ガイドラインに示された学級指導についての説明

#### ③ 学級指導の授業公開

授業研究会の1時間目は、学級指導の授業であった。学級指導の題材は「きれいな歯」であった。授業は、歯磨きの必要性を伝える VTR の視聴、保護者にとつたアンケート（あなたの子供は歯を磨いていますか）の結果の提示、教員によるロールプレイと、つかむ段階のてだては多様であった。てだてが多様にありすぎて、子供たちが本時の学習課題を明確につかめなかったのではないかと考える。

学級指導の授業を組み立てるときに最も大切なことは、子供の意識の流れに沿っているのかということである。ガイドラインに示されている「つかむ」「さぐる」「見付ける」「決める」は、正に、この子供の意識の流れを示したものである。学級指導で自分の生活問題を自主的に解決しようとする態度を育てるのであれば、授業を設計する段階でこのことについての指導が必要になると考える。

この学習過程については、日本の特活指導資料（2014, 国立教育政策研究所）に示されている学級活動(2)の学習過程であり、2017年にカイロ市で行われた MT 研修会で、JICA 専門員である国学院

大学教授杉田洋氏から指導を受けたものである。この学習過程については、特活ガイドラインにも掲載されている。エジプトでは学級活動の内容を集団の問題を話し合って解決する「学級会」と自己の生活課題を解決する「学級指導」としている。

また、第1学年の子供たちの発達の段階を考えると体験的な学びが効果的であると考え。「見付ける」段階において、実際に体験したり試行したりするなどの活動を取り入れることも大切である。このように発達の段階に応じた学級指導の授業を子供たちに提供するためにも、小学1年生からの発達の段階を踏まえた年間指導計画をつくっていくことが肝要だと考える。

報告者は、次の内容を学級指導の授業の検討事項として示した。(表5)

表5：授業研究会で報告者が示した検討事項

1. つかむ段階での検討事項

保護者のアンケート結果にある「家で歯を磨いていない子供の割合が高い。」ことから、なぜ磨かないのかを振り返らせ、「時間がない。」「面倒くさい。」「磨かなくても困らない。」などの個々人の課題発生の原因を探らせる。

2. さぐる段階での検討事項

歯を磨かないことからくる疾病などを知らせ、歯を磨くことの大切さに気付かせる。

3. 見付ける段階での検討事項

上手な歯の磨き方を模型等で説明し、実際に学んだことをもとに実践させる。(子供たちは、教室に自分用の歯磨きセットを置いているので、これを使いながら学習する。)

4. 決める段階での検討事項

上手な歯の磨き方をするために自分にできることを決めさせる。

④ 学級会の授業公開

授業研究会の2時間目は、学級会の授業であった。幼稚園年長児(以下、KG1)年中児(以下、KG2)と一緒にするパーティーの計画について話し合っていた。学級会のはじめの段階では、みんなで歌を歌ったり司会や副司会などの役割を發表したりするなど、基本的な事項は抑えられていた。

話し合いは、教師のリードで進められた。子供たちは、パーティーに必要な遊びやプレゼントについての意見を出していたが、そこには、深まりが見られなかった。その原因は、なぜパーティーをするのか、KG1、KG2と異年齢でパーティーをすることの意義は何なのかが十分に子供たちに理解さ

れていないところにあると考える。つまり、日本の学級会で設定されている「提案理由」(今日の学級会で解決したい問題か何か、どのように解決するのか、そのことで学級はどうなるのか等)が明確に示されていなかったからだと考える。

板書には、「出し合う」「比べる」「まとめる」という話し合いの流れが示してあったが、今後は、この提案理由の設定にこだわって、授業計画を立てるようにすることも大切だと考える。例えば、「今までKG1、KG2のみんなとあまり遊んだことがないので、これから、もっと仲良くなるためのパーティーの計画を立てよう。そのために、今日の学級会では「みんなで遊ぶ遊び」と「プレゼント」について決めましょう。」などである。そうすることによって、子供たちは、KG1、KG2の年下の子供たちと仲良く遊ぶためにはどのような遊びがふさわしいのかを考えながら話し合うだろう。また、子供たちの自治的な活動の範囲を考慮しながらプレゼントはどんなものを送ったらいいのかを話し合えるのではないだろうか。子供たちの発言は、「お金を出してお菓子などを買う。」などの意見が多かったが、家庭で行うパーティーではなく、学校で行う教育活動であるということを教師も子供も理解して、「お金をかけない手作りのプレゼント」について話し合うことを知らせておくことも肝要だと考える。今後の学級会については「話し合う前に決めておくこと」や「パーティーのプログラム」などを提示して話し合いに望むことなどを教師に知らせておいてもいいのではないかと考え、エジプトのプロジェクトスタッフに以下の内容を伝えた。(表6)

表6：報告者が示した学級会の改善例

- |    |                     |
|----|---------------------|
| 1  | 事前に決めておくこと          |
|    | ・パーティーの期日(○月○日 ○時間) |
|    | ・パーティーの場所(教室)       |
| 2  | プログラムの提示            |
| 例) |                     |
| 1  | はじめの言葉(係:○○)        |
| 2  | みんなで○○を歌おう          |
| 3  | みんなで遊ぼう             |
|    | ※今日の学級会で決めます。       |
| 4  | プレゼントをおくろう          |
|    | ※何をおくるか学級会で決めます。    |
| 5  | KG1、KG2の言葉          |
| 6  | 先生のお話               |
| 7  | 終わりの言葉(係:○○)        |

## (2) アシュート EJS における特活セミナーと授業研究会 (2019年4月2日実施)

### ① 特活セミナーにおける MT の指導

アシュートのセミナーでは、MT からエジプトのカリキュラム改革についての説明があった (写真2)。説明では学級会は日本をモデルとしていること、日本では学級会の指導の目安を低学年では「教師が助言する」中学年では「教師に相談する」高学年では「自分たちで実施する」という考え方で指導して成功していること、などの説明があった。

また、ミニ特活 (学級会・学級指導・日直・10分間読書・掃除) などの取組は、欠席が多いエジプトの子供たちの問題解消につながるという説明があり、EJS の日直は固定されたリーダーではなく日によって代わるから平等であるという説明もあった。これは、輪番制について述べている内容であり、エリートを育てる教育を行ってきたエジプトが全ての子供たちに平等な教育を行うために日本式の教育に取り組んでいるという説明であったと考える。さらに、アシュート教育庁の副教育長は、「EJS の活動がうまくいけば、家庭教師などのプライベートレッスンの問題がなくなる。いい学び、いい身体、いい道徳が子供たちに提供することができる。エジプトには『何かをする時は、きちんとやれ。』という教えがあるので、子供たちに必要な教育は、親のように、祖父母のように関わって実施していきましょう。」との話があった。

この内容は、エジプトにおける日本式学校導入の趣旨を示すものだと考える。このような EJS 導入の必要性が、近隣の学校の教職員に伝えられていくことは今後も大切なことだと考える。

ただ、このようなエジプトの課題を解決するための EJS の設置やそこで行われる TOKKATSU を中心とする教育活動、学級会や学級指導がなぜ、エジプトの教育改革に結びついていくのかについては、もう少し、筋道立てて説明をしていくことが求められると考える。



写真2：セミナーで指導する MT

### ② 専門員としての報告者によるセミナー指導

報告者の特活に関する説明については、ケナ EJS において活用したパワーポイントに、通訳からアラビア語の訳を付加してもらったことによつて、参加者の理解は進んだと考える。

今回、学級会と学級指導のガイドラインに示された内容を中心にして説明を試みたが、MT の力量が高ければ、この内容は任せても良いのではないかと考えた。ただ、今後、持続可能な特活にしていくためには、特活でどのような子供を育成するのかという教育的な意義を示し、それを受けた学校は、それぞれの学校の実態に応じてどのような子供を育成するのか、そのためにどのような特活を推進するのかという、学校経営の中での特活の推進目標等を明らかにした全体計画や学級会、学級指導の年間指導計画が必要になってくると考える。

### ② MT による授業研究会での指導

授業研究会では、MT からレッスンスタディの意義について以下のような説明があった。(表7)

表7：MT のレッスンスタディの内容

- ・教師の意見の中から新しいストラテジーを見つけることもある。
- ・多すぎるでだてが子供を混乱させることもある。
- ・人数や学力に応じてでだてを決めることが必要。
- ・子供の個性に応じる。
- ・授業の評価について など

これらの説明も適切な内容であったと考える。ただ、セミナーに参加している近隣の学校の教員等が、レッスンスタディの必要性をどの程度感じているのかについて疑問は残った。

### ④ 公開された学級指導の状況

授業研究の1時間目は学級指導であった (写真3)。題材は「掃除」であった。授業の導入段階では「掃除道具を取り合って喧嘩をしている場面」が指人形で演じられた。アシスタントの教員2名による人形劇であった。子供たちは、歓声をあげながら見入っていた。しかし、ケナ EJS でもそうであったが、子供たちに追求させたい課題が不明確であった。「掃除時間に掃除道具を取り合って喧嘩をすることが課題」なのか「掃除時間が足りなくなったのが課題」なのか「掃除の仕方が課題」なのか、課題と思われる場面が焦点化されていないので、このような問題が起こる。

学級指導は、より良い生活習慣を形成するため

に行動変容を図ることをねらいとする。そのために、一人一人の掃除に対する課題が明確になっておかなければならない。そうすることで、より良い掃除にするための具体的な行動目標が意思決定され、一人一人の実践に結びついていくと考える。



写真3：学級指導の授業

### ⑤ 公開された学級会の状況

アシュートEJSの学級会は、「カルロス君の誕生日」という議題で話し合われた。学級担任が休んだため、急遽、代理の教員が学級会を受け持つことになった。また、1年生の数が少ないので、KG2の子供たちも一緒に話し合っていた。

話し合いは、「出し合う段階」で誕生日に何をするのかということを出し合った。子供達の発言は「プレゼントをあげる」「レクリエーションをする」「風船で遊ぶ」「お菓子を買いたい」「花をプレゼントする」などであった。

次に、「比べる段階」に入ったが、ここの段階でも「風船を買う」「ケーキを買う」「レクリエーションをする」「花をプレゼントする」「カフェテリアでしたい」というような内容であった。ここで明らかなことは、何も出し合う段階で出された意見を比べていないということである。つまり、比べる意見を言うための根拠となる「提案理由」が不明だからである。

ケナEJSでもそうであったが、今後EJSへ学級会の指導を行なっていく場合は「提案理由」の明確化についての指導が求められると考える。そうしなければ、いつまでもこのレベルの学級会で終始するのではないかと考える。

また、子供たちの自治的活動の範囲についても理解を深めておく必要がある。

平成29年告示の学習指導要領解説特別活動編には「個人情報やプライバシーの問題、相手を傷付けるような結果が予想される問題、教育課程の変更に関わる問題、校内のきまりや施設・設備の利用の変更などに関わる問題、金銭の徴収に関わ

る問題、健康・安全に関わる問題など」は話し合わせないということが示されている。これらのことについて具体的に理解させていくが求められると考える。

### 3 カイロ市ザイードEJSとハルガダ10tsラマダンEJSにおける保護者を対象にした取組み (2019年12月28日)

#### ① ザイードEJSでの取組み

ザイードEJSでは、休日に保護者参観が行われた。日本における土曜授業のようなものであった。内容は、保護者が自分たちが昔遊んでいた遊びを子供たちに教えて一緒に遊ぶというものであった。趣旨は、家庭でゲームばかりして遊んでいる子供たちに、自分たちが子供の頃遊んでいた遊びを教え、外で身体を動かして遊ぶ楽しさを知らせたいということであった(写真4)。保護者が子供たちに教えていた遊びは「ビー玉遊び」「鬼ごっこ」「縄跳び」「大型すごろく」であった。



写真4：ビー玉遊びを教えている保護者

このような、保護者と子供たちが休日の学校に集まり活動を共にするという取組みは、これまでEJSを訪問した時に見られなかった。

保護者にEJSの学校経営についての理解を深めようとする取組みは、今後、日本式学校を近隣の学校やエジプト国民に周知することにもつながり意義深いと考えた。

#### ② ハルガダ10tsラマダンEJSでの授業研究会と保護者セミナー (2019年12月30日)

##### ア 授業研究会

ラマダンEJSで行われた学級指導の授業は、題材「清潔な手洗い」であった。本授業も「つかむ」「さぐる」「見付ける」「決める」という学習過程で構成されていた。

つかむ段階では、人形劇を用いて手洗いについての学習をするという見通しを持たせようとしていた(写真5)。

子供たちも人形劇に熱心に見入っており、授業者の授業にかける意気込みを感じた。しかし、演じられている人形劇の内容は、水の無駄遣いについてであり、清潔な手洗いという本時学習の見通しとは焦点がずれたものであった。



写真5：つかむ段階の人形劇

このような授業の導入段階のてだては、日本の小学校を訪問したMTから指導を受けたということであった。しかし、見たものの形は伝えることはできても導入段階の人形劇によって、本時学習で学習する目標を児童一人一人につかませるといふ、つかむ段階のてだての本質までは伝えきれていないと感じた。

本時学習は、2人の教員によるチームティーチングで行われた。2人の教員は、子供たちの応答にその都度肯定的な評価を行ったり頭や身体に優しく触れたりするなど、子供たち一人一人に愛情深く接していることが理解できた。

当該校では、保護者による学級会が行われていた(写真6)。



写真6：保護者による学級会

保護者による学級会は、当該校を指導しているMTが司会役を務め、学校の壁面に描く絵の内容について保護者が話し合っ決めていくというものだった。校長によると、EJSで行われている学級会について保護者の理解を深めるためだといふこ

とであった。話し合いでは、両国の国旗やピラミッドや富士山など両国を代表するものなどを描こうという意見が出されていた。

#### イ 保護者セミナー

ラマダンEJSでは、ハルガダ市の施設に保護者を集めて保護者セミナーを開催した。

このセミナーには、紅海県の副知事や教育長、ハルガダ市の教育長が出席するなど大規模なセミナーとなった。

セミナーの冒頭、紅海県の副知事は「EJSの取組みは、エジプトの将来に対する投資である」と挨拶をした。県の副知事がこのような挨拶をする背景には、EJEPの取組みがエルシーシ大統領が進める国家プロジェクトとして推進していることもある。

本セミナーでは、報告者が特活専門員として特活の理念を保護者に講演を行なった。講演では、特活ガイドラインの内容の説明やEJSに求められていること、試験だけで評価を行ってきた教育からの転換、特活とこれから求められる教育との関係、EJSの保護者の役割などについて話した。保護者は、講演の内容を熱心に聞いていた。

## 4 考察

### (1) ケナEJS, アシュートEJSの訪問を通して

今回の訪問を通して、これまで研修を受けてきたMTの学級会や学級指導に対するレッススタディやEJSの意義についての説明は、非常によくできていたと考える。これまでのMT研修の効果だと考える。ただ今後考慮すべきは、2年生、1年生、KG1、KG2が所属するEJSになっていくのであり、学校としての特活の推進方針を示す「特活の全体計画」や「学級会、学級指導の年間指導計画」の充実が求められると考える。特に、教師が中心に指導する学級指導では、今後の指導が重複せず系統的に行われるよう学級指導のKG2から小学6年生までの「題材一覧表」を作成していくことが必要だと感じた。

アシュートEJSでは、学級指導の時間に眠る子供を見た。この子供は、特別に配慮が必要な子供であり、家庭からの連絡で投棄をしているとのことであった。このように、特別な配慮が必要な子供の在籍は、他のEJSでも見られることだと考える。そのような子供たちに対する教員の適切な実態把握と、その個に応じた指導が今後必要になってくると考える。

特別支援教育の充実は、幼児期から丁寧に行われなければならない。このことから、EJSにおける教育の充実と並行して図られなければならないと考えた。

## (2) ザイド EJS, 10ts ラマダン EJS の訪問を通して

写真7は、掃除の時間にモップで廊下を拭いている子供である。EJSでは掃除の時間がある、子供たちが教師と一緒に清掃をしている。エジプトでは、長く、子供たちに掃除などで働かせてはいけないという考えがあった(表8)。



写真7：掃除の時間に廊下を拭いている児童

中島(2017)は、「子どもを働かせるべきではない、子どもがやることではない」という考えから、当初は保護者の反対の声もあったものの「しかし、子どもたちが家庭でも掃除を始めたことで、理解が得られた」とし、学校での活動が家庭における行動に結びついたことによって、保護者からも一定の評価を得られたことを強調している。」と述べているように、EJSの保護者は、学校や過程における子供たちから学ぶことが多くあり、これまでの古い価値観から脱しようとしていることが、ハルガダでのセミナー後にテレビ局の質問に答えている内容からも分かる。

表8：保護者インタビューの内容

<保護者：母親>

私の娘はEJSに入ってから、だいぶ変わりました。教育上、考え方、習慣も変化しました。EJSは、私たちにとって、とても成功です。成功は、子どもたちだけでなく私たちにも成功です。私たちも、たくさん学んだことがあります。子どもが、大人に教えるのはあり得ないことだったけど、今こんな状況です。

<保護者：父親>

EJSでやっていることは、責任感を育てることです。他の人を頼らないで、自分で責任をも

ってやるようになりました。問題の解決をするための考える力が伸びました。学校でも家でもその様子が見られます。例えば、家に帰ったら、すぐお母さんを手伝いたいと言います。家に帰ったら、すぐに自分のもの、かばんを片付けます。学校でどんなことをしたか、説明してくれます。床に落ちているものを拾います。違う場所にあるものを、元のところに戻します。

この日もセミナーの後、会場を清掃している保護者や子供たちの姿を目にしたが、このプロジェクトの現地スタッフは「この姿がEJSの最も大きな成果である」と言っている。

ただ、EJSの保護者の評価が、他の公立学校の保護者やエジプト国民に届くまでには、多くの課題を乗り越えなければならない。それは、まず教員の経済的な補償である。公立学校の教員は、学校を終わらせてから副業として塾の講師や家庭教師をやらなければ生計が成り立たない状況も見られる。このような教員が、EJSで行われている教育を理解して実践しようとする意欲が生まれてくるだろうか。教員養成段階で教員の水準を高める取組みが必要となってくると考える。

次に、現段階で40校のEJSは、他の公立学校よりも高い授業料を支払わなければならない。そこに通ってきている子供たちは、比較的裕福な家庭の子供たちである。

そのような子供たちの教育が、他の公立学校の保護者や国民に広く受け入れられるのかという疑問も残る。

ただ、ハルガダのEJSに勤務する教員の殆どが明るく元気な女性教師であり教員同士の結びつきも強固なものを感じられた。

そして、学校長を中心に学校が一つにまとまっており、教員たちには「自分たちは日本式学校に勤めている」という誇りのようなものまでも抱いているようでもあった。

さらに、EJSの保護者も子供たちをよりよく導いている日本式学校の教員を信頼し協力的であった。

このような姿が認められるようになれば、日本式学校がエジプト国に広く認められ、取り入れられていくのではないかと期待も生まれてくる。

### 主な参考文献

中島悠介(2017) エジプトにおける「特別活動」を通じた日本式教育の導入と課題に関する考察 大谷教育福祉研究 43号/4